



「こ、こは……ッ!? ダーカーに襲われて……  
それから、……あっ!?!」



「ひ、やだ……！近寄らないで……」



ク  
ク  
ク

ク  
ク

あ  
…

ク  
ク  
ク



「.....あ、や.....うあつ!?  
そこ.....はっ、うううん.....んっ!」





「あ……がッ!? うあああッあ!  
あ、そん、つああ! うううああッ!」





「んぐっ!?んっ……んむっ!  
はっ、んんっ……!」





「ひ、……ぎっ!? えうあがつ!  
はへっ、っ……うええっ!」





「.....? ?.....! ?<.....」











「.....んっ、ふりうん.....っ！  
.....っ！ .....う.....あっ.....」

END







「あ……ちよつと!?こら、  
ドヨさわってっ……、ひやあつ!?!」





「も、……うっ、調子に、……のる  
なあっ!?……そこ、……わああッ!?!」



「えっ……、嘘!?だめ、……うえっ!?  
はいって……だ、……えああッ!  
そんな、いっぺんに……ひあッ!?!」





「……お、おおおつ!?  
ふ……とお、……ッ!  
おひ、こわ……、りえりゆつ……っ!」





「ひ……いいッ!? また、 あああッ!?  
や、 ……あ……ッ! はいって、 こな、 で……」





「な……ん、むぐッ!?んんッ!?  
ふく……ッ!んん~~~~ッ!」





「ふ……、んがッ……！……あ  
はっ、……あ……うあっ！」



「う……、ふ……うっ、うあ……  
もう、……だ……ええっ！」





「……あ、やえ……、れちや……  
あ……あ、……ああ~~~~~ツ！」

あ、あ、

あ、



あ、あ、







「さて、我々に協力するなら、命だけは助けてやらないこともないが？」

「……だ、それが……っ！」





「そうか、残念だ。……やれ」





「ぐ……うッ!」

「ふふ、身体だけは頑丈のようだな」











「おら、さっさと啜えろよ」

「……ッ!」

「嫌なら、それでもいいけどよ。もう一人の子は相手が増えて大変だなあ?」

「うくっ……、卑怯、者……!」



んく







「下の回にも突っ込んでやるぜ」

「ふん……ッ!? うぐ……んッ!」

「オークチンポのお下がりでも、なかなかキツいじゃねえか」





「おっど、深く……しゃぶるわよー！」

「ぐ……ラッ!? あむ……じゅるんー！」

「うっちもなー！」





「出すぞ……!こぼすなよっ!」

「おらっ!孕めッ」

「ん……んんんんんッ!?……ぐんッー!」





「ぶはっ……く……う」

「はは、どうだ？うまいだろ」

「……そ、な……わけ……ッ」

「お気に召さないか。これからお前のドリシク代わりになるのに」

「あ、」

「あ、」

「あ、」

「あ、」

「ん、」

「ん、」

「ん、」









「別にいいめてねえし？」

チンポに囲まれて嬉しうよなあ？」

は

あ

お

あ

「う……、おちん……ぽ、すきねぶ……  
じめるッ……、おいひ……れす」

ムムム

ムム

ちゅ

ちゅ









「う……あ、……はあっ！」

「んじや、次は俺とやるうぜ」

あ

う

あ

れろ

あ

「……、やすま、せて……くだら」

「……ん？」

「なんれも、ないで、す……」





「……あ、……あはッ！もっど、……お」

「まったく、女は底無しだな」

あ

あ

あ

ちゅる

あ

あ

「ほら、チンポはなせつて。」

他の奴連れてきてやっから」

「あ……、たらし、……の……」

ヒューッ

ヒューッ

あ

あ





「ほら、再開ける」

「あ……あ、……は……ラッ」

「だいぶ壊れちまったな。マグロじやつまんねーよ」

んんん

はー

んんん

んんん

んんん

あー

んんん





「ならケツに突っ込んでやれよ。まだいい反応するぜ」

「ん……ッ、んふ……ん……ッ!?」

「くそ、いやさらさら」

「んんんん」

「んんんん」

「アハハハ」

「んんんん」

「おっちゃん」

「んんんん」

「アハハハ」

「んんんん」









「おら、どうだ？ケツ穴でイけたか？」

「……ッ、……あ……う」

「ふりや、もう使えねえな。仕方ないー」

あ、あ

あ

ん

ん

あ

あ

ん

ん









「やれやれ、こつちばこつちで俺達が奉仕してるみたいじゃねえか」

「うあッ! まら、く……ら、ひらッ!」

ぞくぞく

びん

「よし、じゃあもう……」

連れてってやるよ」

「あ、はッ! い、く……ら……ッ」

あは、

あ

あ





















「じゃ、挨拶も終わったし

しゃぶってしゃぶって」

「わかって、るわよ……、んっ……！」

んっ

ちゅっ

んっ

んっ

ぢゅっ

びく

ぢゅっ

ぢゅっ

ぢゅっ

「そうそう、落ち目なんだから  
体張ってもらわないとな！」

びく





「うっちもへろへろしてくれよ」

「ん、もう……っ！……んんっ！」

あ、あ

あ、あ

「あ、もう出るぞ」

「……は、ちよつとまって……うあッ!?!」

んん、

んん、

んん、

んん、





「話が、違……っ！膣内には……出さないって……」

「何言ってるんの生ハメなら中ダシでしょ」

は……

あ

はー

「ほらほら手と口が止まってるぞ」

「う……もう、どうなっても……、知らないから」





「じゃ、こっちに入れたらどうなるか、な？」  
「あ、ぐぐぐ……、ちよつと……おッ！」

ぬ、ぬ  
かっ  
おッ

「空いた穴、誰か塞いでやれよ」  
「ま、……てッ！おひ……りいッ！」

ん、ん

ん、ん

ミラー  
ミラー

ッ、ッ



「ひ……らっ！あ、うそ……ああッ!?  
りよう、ほう……、ひろが……て」

あ、あ、

あ、あ、

あ、あ、

あ、あ、





「く、そんなに、締め付けられたら

……出る……うー」

「あ、……ふあつ、あああつ……！」





「……はっ、あ……あッ……また、なかに……」

「ああ、言ってなかったけど、こういう企画だから」

「じゃ、次の奴と交代だ」

ヌル…

ヌル…

ヌル…

「そん、な……」





「これでラストだ。流石アイドル、よかったぜ」  
「ほら、ポーズ決めてポーズ」  
「……あ、うあつ……あ」

「それじゃ、今日の放送はここまで！」  
「以上、現役アイドル生ハメ強制妊娠ファン感謝祭でした！」

ゴッブ





「みんな……、あつ……！」

「おら、ちゃんと喋れっ！」

「ひ、やめ……、しゃべ……から、ケツあ、な

ほじ……らッ、やめ……はあッ！」

は

あ

「という訳で、無事妊娠できたっつー途中経過報告でした！」

……締め挨拶は——」

「あ、いぐ……うあッ！は、あああッ！」

「駄目そうだな」

んぐ、

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

END





「しま……っ！」

(な……ぜ、振り解けない!?)

は

は

は  
は  
は









「こん、なっ……うあああッ!?  
そこ……は、によ、うど……っ!?!」

あ  
……





「……何してんの、こんなところで」  
「貴方、は……、よか……つ、  
たす……け、ひん……ッ!?!」  
「えー？でも殺されそうになっただなあ」





がし

ク  
ス

ぐ  
ちゅ

う  
め

ん  
ん

あ  
め

わ  
ち

「あれ、は……、ち、……がつ!?!」  
「お、一つ穴あいてんじやーん」  
「うそ、……っ!?!やめ、……やめて——」









「へ、……なかなかキツいな！」  
「ぬ……い、で……えうッ！」  
「なに、もう……出、るぞ！」





「……結構よかったぜ」

「う……ぐ、……うらッ」

「んじゃ、俺は行くから。頑張れよ」

は、あ、

うあ

はー

は、

うん

うん

うん





「な……、待って、たす……!?  
何……、それ……えッ!」









「なんだ、まだ捕まっていたのか」

「あ……、はっ……あッ！

ひああッ！」

「元六芒がケツ穴穿られてヨガってんじやねえよ」





「……は、うあつ……はあッ!?  
う、ま……っ! でう……ううッ!」  
「聞こえてねえなこれ……、まいいや  
貴重なシーンだ録画しておこう」





「あ……あ、まつ……で、

あは……つ、 ああ……あつ」

「やれやれ。このまま放つとくと

ガムアネモネが増え続けて邪魔だが……どうするかな——」

END







「え……? どうい、うッ——」

突然、下半身に激痛が走った。

「ッ~~~~~!!!!」

呼吸もまともにできず、声にならない  
悲鳴を上げる。

「……んぶ、うぞ……おオッ!?!」

人の何倍もある男性器が、杭のように刺さった。  
幸か不幸か、常人より頑丈な身体は  
裂けることはなかった。





「あ……ッ、ああッ!?やえッ!?

あ!ぎっ、ぐああッ!はえああッ!!!

オナホールのように、激しく身体を揺さぶられる。

「たしゅッ!?うああッ!……あ!かはッ!」

いっそ仲間達のようになってしまえたら、

そんなことを考えていると、

男性器がさらに固く、膨張し動きも激しくなった。

「……あッああッ!?, うああ……はあッ!」





「……あ、つうッ!?うあッは! ああああッ!?!」

大量の精液が膣内に注がれる。

「あッ……、はああ……! ああッ……」

しかし、膣内射精されたという嫌悪感より  
この痛みからようやく開放されるという  
安堵感の方が、強かった。









「やへ……へえ……ツ！やら……ツ、らああツ!?

なんれ、……あぐ、……はあつ!?

身体に異変が起きた事に気づいたのは、  
間も無くだった。

「……あ、……ひ……いぎいつ!?

ダーカー因子の影響なのか、原因はわからないが、  
生かされていた理由はわかってしまった。









「……い……ひッ!?……ま、らああッ!?!」

再度男性器を挿入され、

まだ終わりではないという絶望とともに  
泣き叫ぶが、誰にも悲鳴は届かなかった。

「あ……っ、はあ……ッ!……、うあッ!?

は……!……ああ、あ~~~~っ!」



END









「ほーら早く起きないとおじさんの  
チンポ入っちゃうぞー」  
「う……、ん……ン！」









「ん……ッ!?, フグッ……、ん~~~~ッ!?!」

「お、邪魔してるよ」

「ッッ!んんッ!!ん……ッ!」

「そんなに締め付けないでくれよ。ただでさえ新品マンコなんだから」





「……んんッ!……んぐ、んんんッ!」

「なんとか奥まで入ったが、痛そうだな……」

あそうだ。地球の玩具あつただる」

「おう、手伝ってやるから早く代われよ」





「えーと、スイッチこれか」

「ん~~~~ッ!?.....ん、んんぐううラッ!?!」

「おっと、口を塞いだままでは苦しいか」





「.....ふ、はッ.....!?いた、あああッ! やめ  
いや.....、やえ、へええッ!」

「痛がつてるじゃないか、下手くそめ」

「だからってクリにそんなもん押し付けるかよ」





「あ……、やッ……いや、ああッ！」

「う……うっ！で、る……」

「ひあ……!?あああああッ！」





「……は、あ……、あ……」

「ふう……ッ！おじさんが初めての男だって、忘れないでくれよな！」

「可哀想に……んじゃ次、俺のぼーん」

「ひ……いや、……いやああッ!?!」













「これあってんのかなー、トーキョーの文字難しいぞ」  
「さあ……ま、次はいい人に拾われるといいっすね」  
「え、俺いい人だろ。んじゃ名残惜しいけど……」  
「次はもっと増やしましょ。キープされちゃたまんないっすよ」

END



「あ、の……、やっぱり、こういうのは  
まだ早いかと……」

「そんな事ないさ。ほら、  
俺達って命がけじゃん？

やれる事はやっておかないと！」 <

「し、しかし……」

「こういう経験もして  
一人前になるんだよ！」

は

は

ズ  
ズ

ズ  
ズ





「それに、興味があったから  
ついてきたんだろ？」

「そ、それは……その、あつ……!?!」

「いいからいいから。  
まかせとけて!!」





「そら、チンポは行っていくぞ」

「あ、……うあ、ああつ……!?

い、た……ッあ!」

「気持ちいいって、

嘘でもいいから言ってみな」

「……い、い……ですっ」

「もっとはっきりと!

ほら、おまんこ気持ちいい」





「おま、んこ……、いい……ですッ！」  
「そうそう。じゃ、俺のちんぽも  
気持ちよくしてくれ」  
「……あ、は……ひいっ！」













「お、いい吸い付きだな」

「……んっ、ひんほ……、おいひ、れす」

「へへ、さっきまで処女だったのにな」

「れる……ッ、んむ……

ず、じゅずッ！」

「ほら、また出すぞ！

まんこ集中しろ！」

「ん……！んんん〜ッ！」













「いやー……、デキちゃいましたねえ」

「そうだな」

「だから避妊しようって言ったのに」

「……言ったっけ？」

「言ってないけど」

「う……、もっる……、んんツ！」

「ま、それはそれとして」

「早く代われ」

「わかってる、よ！」



END



「し、ま……っ、うわああッ!?!」





「……くっ、冷静に……この相手は  
暴れれ、ば……あ、ひええッ!?!」







「あ……ッ!?うそ……!?いや、  
はいつて……、なん、はあああつ!?!」

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ









「ひ……う、えああッ!?……う、ああああッ！」









「ひゃ……うッ!? まら……、 れで……っ!？」

















「あッ……!?な、何を……!?!」

「共闘、手伝っただる? そのお礼を  
してもらおうかと思ってな」

「お、れい……だと? 何をしたら——」





「大したことじゃない、さ！」

「な、あ……ぐッ!?何を……っ!?!」

「ちょっと尻を借りるだけ、だよ」





「や、め……、こんな……あっ!?!」

2 「こっちじゃスポーツみたいなものだ」

「そう、なの……か……?」

「そうそう、ところで俺も混ぜてくれ」





おっ

エエエ...

おっ

おっ

んん

「.....まッ、て.....、ああああッ!?!」

「前の穴もーらい」

「あ、うああああッ!」

アッ

アッ

アッ

アッ













「ほら、いい運動になったる？」

「あ……あ、……はっ……」

「また、やるうねー」





「お、……おッ!?うあッ!」

「だいぶ腹でできたなあ」

「おまへ、らひが……らまひ、てええ!?!」

「まあまあ、感じたら同意の上だから」





「あ……、そえ、やええッ!?!」

「お、ケツ穴が締まったぞ」

「乳首弱いもんなー」





「……は、はあ……ッ、ああッ!?!」

「俺も、参加しようっと」

「な、あッ!?!うああああッ!」





END